

## 『たまきはる』における夢の表象

今 関 敏 子

キーワード 比喩の夢 夢内容の記述 回想 時間 意味連関

### 要 旨

藤原俊成の娘。定家より五歳年長の姉であり、建春門院・八条院・春華門院に仕えた女房であった。

『たまきはる』は、作者が完結させた本文と、作者の棄てた草稿を後人が拾った奥書以降から成る。本文には、周到な構成意識がみられ、冒頭部はその内容と相似し、建春門院と春華門院の存在性と喪失を表象している。この形態上の特質は、書かれる夢にも反映している。比喩の「夢」の語例は本文にあつて、奥書以降にはない。また、「夢の記述」は本文にはなく、奥書以降にある。奥書以降に残された睡眠時の夢は、作者の意図を越えて、お仕えした女院たちの存在意義と意味連関をさらに具体的に浮き彫りにすることに一役買ったのである。

### 一、はじめに

鎌倉期の女性仮名日記『たまきはる』の作者・健御前は、

『たまきはる』には、他に例を見ない形態上の特異性がある。それは、作品が、本文と奥書以降の記事に二分されることである。作者自身が推敲の結果、成稿と見なし、ひとたび筆を擱いた後、本文に採択されなかった草稿が、後人（藤原定家）の手によって追加されているのである。捨てたはずの草稿が世に残るとは、作者は予想もしなかったであろう。このような作品をいかに読むべきか。読みようによっては、奥書以降にはむしろ本文よりも文学的感興を呼び起す箇所が少なくないのである。言うまでもなく、読者は、虚心坦懐に残されたすべてを味わえばよいのである。ただし、研究者には、分析的な考察が当然要求されよう。

『たまきはる』に夢はどのように表出されているのだろうか。夢を論じるにも、本文と奥書以降の分断を看過出来ない。

まず、睡眠中の夢の記述であるが、本文には皆無である。

ただし、「夢」の語例は11例見出せる。これらは、現実が「夢」のように儂い」という比喩の用例がほとんどである。中には後述するように、睡眠中の夢をさす例もあるが、いかなる夢かという夢の内容の「記述」は本文にはない。

夢の内容の記述は、奥書以降に集中しているのである。すなわち、作者によって捨象された草稿に、夢は記述されていたのである。作者にはそれらを世に残す意図はなかったということになる。一方、本文に特徴的にみられる比喩の「夢」の語例は、奥書以降には皆無である。

すなわち、比喩の「夢」の語例は本文にあつて、奥書以降にはなく、「夢の記述」は本文にはなく、奥書以降にある。本稿では、執筆意図と摺筆の問題も含め、自己を素材にして綴る際の時間と回想という視点から、『たまきはる』における夢を考えたい。<sup>④</sup>

## 二、冒頭部「見し夢」

### I 冒頭部

まずは、長くなるが、作品冒頭部を引用する（論を展開する上で必要な箇所を太字にする）。

たまきはる命をあだに聞きしかど君恋ひわぶる年は  
経にけり

あるかなきかの身の果てに、時の間も思しづめむ方なき悲しさの、身に余りぬる果てくは、まことに忍びもあへぬ、うつし心もなき心地のみすれど、数ふれば、長らへにけるほども心憂し。さりとして、かゝる物思ふ時だに、ひたすら憂き世を厭ひ離るゝ道のしるべとも、思ひ取られんをだに、うれしかりける前の世の御契とも思ひなさまほしけれど、月日の隔たり行まゝには、たゞかき乱し、言ふかひなく恋しき御面影のみ、つゆばかり慰さむ方なし。何によそへて、おのづから思ひなぞらふる方もありなんと、せめて思ひまはせど、この世の色も匂ひも、飽かずのみ嫌はしきこそ、せん方なけれ。猶弥生の空あたりも匂ふばかりなる桜ばかりや、大方のことざまにも思ひよそふれど、さしもほどなき名を分きし御名の恨めしさにつけても、さすが思ひ捨つまじき心地して、いたづらなるまゝ、ながめ暮らす日数の、幾日とだにたどられぬに、移ろふほどなき風の情なさも、見し夢に変わらさず。

あぢきなきその名ばかりを形見にてながむる花も散るぞ悲しき  
(253〜254頁)

冒頭部の表現の特徴は、固有名詞がなく、隠喩が多いことであろう<sup>⑤</sup>。従つて、老残の孤独と深い喪失感<sup>⑥</sup>は伝わってくるものの、具体的に何を表現したいのかが解り難い。「見し夢」

(傍線部)が何を指すのかも、冒頭部全体の解釈如何によつて変わってしまうのである。

## II 冒頭部と追慕歌群の照応

一方、本文には、建春門院・春華門院に対する追慕歌群がある。各々番号を付して示す。

### ○建春門院

- 1 思ひ出づるわが心とてうつゝ、かは初めも果ても知らぬ  
かげろふ
- 2 面影の見し人数は忘れねど語るは夢に変はらざりけり
- 3 過ぎにしも今ゆくすゑも寝るが中のはかなき夢よいつ  
か覚むべき
- 4 思へどもあるかなさかの世中に今日までいかなながら  
ふる身ぞ
- 5 惜しみかね昔も今も散る花や憂き世をいとふ道のしる  
べは

(293頁)

### ○春華門院

- 1 花の色も月の光もあかざりしこの世ならでもさやにほ  
ふ覧
- 2 恋しさのしばし忘るゝ時もなき憂き世の夢はいつか覚  
むべき
- 3 かぎりなき面影ばかりとゞめおきていかなる道の姿な

るらん

- 4 花の散り露の消ゆるもほどぞある夢にまどひし曙の空
- 5 白玉の袖よりほかに乱れにし夢にまどひて消えなまし  
かば

- 6 夢にさだかに見えぬ会ふ事を寝るがうちとて待つぞ  
はかなき

- 7 春の花散りにし空にあふげども光も知らぬ月日なりけ  
り

- 8 たれもみなはかなき世とは嘆くともためしも知らぬ我  
思ひかな

(303～304頁)

いずれの女院についても「夢」(□部)「花」(○部)の語が見出される。春華門院追慕8首のうちに「花」の用例が3例みられるのは、ひとつには、春華門院という院号に因むものである。そして、春華門院追慕最終歌「たれもみな…」をもつて本文は終結する。

冒頭部の太字で示した箇所と追慕歌の表現、語句の選択には照応関係がある。表に示せば次ページのようになる。

\*印「恋しき御面影」「見し夢」は双方に重なるが、この表から冒頭部前半は建春門院追慕歌に、後半は春華門院追慕歌に類似の多いことが一目瞭然であり、単なる偶然とは考えにくい。冒頭部前半は建春門院を、後半は春華門院を対象に叙述されていると推測し得る。

冒頭部	追慕歌番号
<p>あるかなきかの身の果て 果てく うつし心もなき心地のみすれど 長らへにけるほども心憂し 憂き世を厭ひ離るゝ道のしるべ *恋しき御面影</p>	<p>建1果て 建1果て 建1うつつかは 建4いかにながらふる 身ぞ 建5憂き世をいとふ道 のしるべは 建2面影の 春2恋しき 春3面影 春1花の色も月の光も あかざりしこの世なら でもさやにほふ覧 建2夢 建3はかなき夢 春2憂き世の夢 春7春の花散りにし空 にあふげども</p>

建は建春門院追慕歌、春は春華門院追慕歌を示す。

「見し夢」は何をさすか

冒頭部の読解については、既に論じたので、繰り返しを避けるが、重要なのは、冒頭部の構成が本文の構成と相似形である、ということである。本文には建春門院との出会い、宮仕えの様相、建春門院崩御、八条院出仕と春華門院との邂逅、別れという順序で女房としての四十年が綴られる。建春門院に始まって、春華門院の崩御に終る時間序列は、冒頭部も同様である。冒頭部には本文の内容がきわめて本質的に総括されていると考へ得る。

必要な語句を補って冒頭部を現代語訳をすれば次のようになるう。

命ははかないものときいていたけれど、(折に触れては亡き)建春門院を慕う心を持って余して長い年月が経ってしまったことよ。

取るに足らない人生の終わりに少しも慰めようのない悲しさをこらえきれない身の果てはまことに堪え難く、まったくもう生きている心地がしなけれど、数えろと長生きした年月もうとましい。それにしても、こんな風に物思いをする時間さえも、ひたすら憂き世を離れる道しるべ(になるのだ)とも考へられることをせめて、ありがたい前世の契りなのだと思ひ切りたけれど、月日

が隔たるにつれ、ただ心が乱れ、言っても甲斐のない建春門院の恋しい面影ばかり（が浮んで）少しも慰められる手だてがない。何に譬えて自然に比べるものがあるかと、せめて思いめぐらす、この世の（どんな）色も匂いも（譬えるには）不十分で、厭わしいばかりなのはどうしようもない。それでも、三月の空一面に匂う桜（そして、桜の意の院号をもつ春華門院）だけ、だいたいの様子に思いなぞらえるが、あんなにも儂い名（春の院号に桜を示す春の花）を分けたお名前の恨めしさにつけても、（春華門院の崩御を）やはり思い切ることが出来ない気がして、することがないまま、物思いにふけて（桜を）眺める日数を幾日とも数えないうちに散る、慌しく吹く風の無情さ（春華門院の早過ぎる崩御）も、（昔）

見た夢（のような建春門院崩御）に変わらない。

やるせないその名前ばかりを思い出のよすがにして眺める桜も散る（奇しくも院号を分けられた春華門院を建春門院の思い出のよすがにしてお育て申し上げたのに、花のように散ってしまう）のがとても悲しい。

「見し夢」は、花のように散った儂い建春門院崩御をさす。奇しくも春の花の院号をもたれた春華門院もまた、若く美しいまま世を去ったのである。冒頭部には、具体的な出来事の

叙述を避け、固有名詞を用いず、比喻を通して愛と美と死が表出される。女院方の生きた時間と存在の意味が桜花に、その崩御が散る桜に譬えられるのが特徴的である。

### 三、本文にみる「夢」の語例

既に触れたように、本文には、夢内容の記述は皆無だが、「夢」の語例は見出せる。「夢」11例のうち、1例は宮廷儀式の記述「その日は打出での前に、つくるひ据へ（悉）られにしのち、行幸も大行道も<sup>ゆめ</sup>にだに見ず。（287頁）」がある。作者自身の人生を語るものは、次の1例。

六十路の夢は時の間の心地すれど  
（254頁）

「六十路の夢」は、六十年の自己の人生が夢のようであったという比喻である。

この他の用例9例は建春門院崩御と春華門院崩御の記述に集中するのである。各々をみていくことにしよう。

#### I 建春門院と「夢」の語例

建春門院にまつわる「夢」の語例は、既にみた冒頭部の例を含め、本文に4例。

建春門院崩御は、本文では次のように書かれている。

やがてその年の七月、花の散るやうなりし夢のはかなさ

に、桜ばかり、昔も今も恨めしく、さすが形見なる色も  
匂ひもなかりけり。  
(288～289頁)

「花の散るやうなりし夢のはかなさ」と形容される死は、ま  
さしく冒頭部の「見し夢」に照応しよう。この時、作者二十  
歳。同じ年の春には、後白河法皇五十賀の盛儀があり、その  
華やかさの記述にはかなりの紙幅が費やされ、女房たちの晴  
れやかな衣裳が、春爛漫の季節にふさわしく詳述されている。  
それだけに、秋に建春門院が世を去った悲しみが浮彫りにな  
る。喜びの春と悲しみの秋は対照的であった。「花の散るや  
う」な死は、花の季節の盛儀に比してまさに夢のような儚さ  
であった。これ以降、桜は、作者の人生を語るとき、美と悲  
哀を象徴する花となった。

既に掲げた建春門院追慕歌5首のうち、夢の用例は2例。

- 2 面影の見し人数は忘れねど語るは夢に変はらざりけり
- 3 過ぎにしも今ゆくすゑも寝るが中のはかなき夢よいつ  
か覚むべき (293頁)

「面影の……」歌の夢は、過去（建春門院出仕時代）に会っ  
た人々を覚えてはいるけれど、それを語れば夢と変らないと  
いうのである。「過ぎにしも……」歌では、過去も現在も夢  
のようだというのである。

以上のように、本文の建春門院崩御をめぐる「夢」の語例  
はいずれも儚さの比喩である。

## Ⅱ 春華門院と「夢」の語例

春華門院崩御にまつわる「夢」の用例は5例。儚さの比喩  
は2例。

まず、亡き春華門院の思い出を語る初めに次のような記述  
が見える。

さて、この憂き世の夢は、その御方とて、とありか、り  
と見定むるほどの事もなかりき。 (302頁)

全く同じ語例が追慕歌に見出せる。

2 恋しさのしばし忘る、時もなき憂き世の夢はいつか覚  
むべき (303頁)

「憂き世の夢」2例は、春華門院の存在性を凝縮した比喩  
である。建春門院追慕歌「はかなき夢よいつか覚むべき (293  
頁)」、春華門院追慕歌「憂き世の夢はいつか覚むべき (303頁)」  
の表現の類似性も注目される。儚さを夢に譬えるのは、常套  
表現であるが、『たまきはる』の場合は、ふたりの女院に集  
中していることが重要であろう。夢の語は周到に選ばれてい  
る。「六十路の夢」である作者の人生で遭遇した儚い女院方  
の崩御が、桜花の儚さ・美しさと響き合って「夢」と表現さ  
れる。冒頭部に照らしても、この点は統合性のある、実に洗  
練度の高い表現と言えよう。

本文中、建春門院に関する「夢」が比喩で統一されている  
のとは異なり、さらに春華門院追慕歌に特徴的なのは、4例

の「夢」の語例のうち3例は、睡眠中に見る夢をさしていることである。

4 花の散り露の消ゆるもほどぞある夢にまどひし曙の空

5 白玉の袖よりほかに乱れにし夢にまどひて消えなまし

かば

(304頁)

6 夢だにさだかに見えぬ会ふ事を寝るがうちとて待つぞ

はかなき

(304頁)

「夢にまどふ」(～部)という用例が2例ある。「憂き世の夢」2例にもみたように、表現の重複も春華門院に関しては目につく。このように春華門院に関しては、表現に多少の揺らぎがみえ、その崩御が作者にとって建春門院とは意味の異なるものであることを示しているように思われる。

3首の「夢」は睡眠中にみる夢をさすが、その内容が具体的に「記述」されることはない。

とりわけ「白玉の…」歌は、消えてしまえばよかったという程強い思いを残した夢が、いったいどのようなものだったのが、本文だけでは、読者に伝わらない。

#### 四、睡眠時の夢の記述

##### I 春華門院の夢

奥書以降はまさしく春華門院の夢内容の記述が始まる。

袖に乱る、白玉とあるは、いまだ明け暮れ添ひさぶらひし時の夢なり。抱きまゐらせてありく程に、白き水晶の玉にておはしましけるを、取りはづして落としまゐらせて、こまぐと割れ碎けぬるを、いかにすべしともなくあさましく、泣くく袖に取り入と思て、覚めぬ。うつゝに涙はこぼれて、胸もひしげ、あさましくおほえしかど、夢は人に語れば忌むとかや聞きしに、つゝみて、たゞ朝日ばかりに祈り念せしに、かく思のほかにさぶらひ果てぬる身となりしかば、さて見えけるにやと思ひなして過ぎしに、このごろはただ、その玉の碎けにし夢の内の心地にて、明かし暮らせば夢もいまさらうとまし。

(305頁)

草稿が拾われたことによって、本文の春華門院追慕歌「白玉の袖よりほかに乱れにし夢にまどひて消えなましかば」の「夢」の内容が具体的に明かされることになる。和歌に詠まれていたのは、幼い春華門院が腕の中で白玉に変容したのを、健御前が落とし、碎け散ってしまう夢だったのである。定家は、本文の白玉の歌を説明する必要があるという読者としての立場でこの夢の記述を拾った、とも考え得る。

夢の内容をみよう。

女院を「抱きまゐらせてありく」のは、健御前の行為であ

る。すると、春華門院の身体が変容してしまう。「白き水晶の玉」は、気高さ、透明感、美しさの象徴であろうが、同時に、春華門院の身に異変が起こるといふ不吉な予兆である。それを「取りはづして落としまゐらせ」たのは、作者の失態である。

その結果「こまぐと割れ砕けぬる」水晶の玉は、春華門院のさらなる変異である。原型をとどめぬ水晶を再び腕に抱くことは出来ない。取り返しのつかぬ出来事に成す術もなく、袖にしまう——「いかにすべしともなくあさましく、泣く／＼袖に取り入る」——しかない。

作者の腕の中で変る、作者が落すという夢は、主人を守る立場を全う出来なかつたことの表象であろう。夢から覚めた後も、「夢でよかつた」という安堵感はない。夢で感じた悲哀、喪失感、衝撃はそのまま現実——「うつゝに涙はこぼれて、胸もひしげ、あさましくおぼえしか」——であり、作者を苛むものである。

後に、春華門院の養育から離れることになつた作者は「かく思のほかに、さぶらひ果てぬ身となりしかば、さて見えけるにやと思ひなして」——最後までお仕え出来ぬ予知夢だつたのだと捉えて過ごした。しかし、そうではなかつた。夢は早過ぎる崩御を告げていた。それが後になつてわかるのである。この夢を書いている時点でも夢の記憶は反芻され、

白玉が砕け散つた悲哀、喪失感、絶望感を追体験するのである。

誰にも語らず、自分の胸にしまつておいた夢は、「白玉の神よりほかに乱れにし……」歌として、本文の終結部に記載されたが、苦悩をよみがえらせる夢の内容の記述を作者は意圖的に避けたのである。

滅びの予知夢が、続けて記述される。春華門院が唐猫に変身する夢である。

また大女院の御色着たるころ、八条殿にて、人／＼の経読ませ給に交じりて、久しく参らぬころ、幼くおはしまし、を抱きまゐらせてゐたと思ふほどに、唐猫のうつくしげなるにておはしましける、「あなあさまし。いかなる事ぞ」と思て、うちおどろきたりしに、心騒ぎて、心の及ぶ程、方／＼に御祈りせさせ、又さぶらひ合はる、人／＼にも、御祈りの事をのみ申やりしかど、人はさしも思合はれず、御祓への行幸の御棧敷をのみ、出で立ち合はれたりしに、かゝる尼の身に、申し出づべくもなかりし事を、例の身の上かへりみぬ心の癖に、二位殿に参りて、思し事どもを申たりしに、その御幸のとまりにしを、限りなくうれしと思ふかひもなく、例ならぬことさへ出で来ぬ。

八条院が六月に崩御され、喪の明けぬ頃、久しく拝謁しな

(305～306頁)



かった春華門院がかわいらしげな唐猫に変わる夢をみた。現実には既に十七歳の春華門院が夢の中では未だ幼く、抱いていた作者の腕の中で変容するのである。

女性の死と猫といえは、『更級日記』が想起される。『更級日記』では、大納言の女が死後、猫への転生したということと『たまきはる』では状況がおおいに異なっている。『更級日記』では、大納言女の死後の夢である。しかも夢を見たのは作者ではなく姉であった。

『たまきはる』の場合、春華門院存命中に作者自身がみた夢である。予知夢である事、春華門院が変身すること、それが夢の中の作者自身の行為に関わりがあるという点で、唐猫の夢は白玉の夢と同型である。そしてここでもまた、覚めて後に「夢でよかった」という安堵感はない。唐猫の夢を見たのと同じ年の十一月、春華門院崩御は現実となる。

白玉の夢と唐猫の夢は、続けて記載されているが、夢を見た時間には隔たりがある。このことの意味は重いように思われる。白玉の夢は、未だ養育に携わっていた頃の夢である。この不吉な夢の真の意味を知るには時間が必要であった。一方、唐猫の夢は、春華門院の死が間近な頃に見た夢である。唐猫の夢は何年も前に見た同型の夢を想起させ、凶夢の意味を連関を直観したことであろう。時を経て、二度にわたるメッ

セージを受けた作者は、もはや夢を無視するわけにはいかなかった。夢の伝達を現実のものとして受け止め、すぐに行動を起こしている。周囲に働きかけるが理解されず、健御前の願いは届かなかった。しかも夢の予兆は的中した。春華門院を守ることはついに叶わなかったのである。

その無念さに今も捕らわれている。いかに物理的な時間を長く経ても、悔いを残す出来事は個人の内面では容易に過去にはならない。春華門院の夢を書き残すことは、執筆時点においても苦痛と悲哀を伴うものであった。人の目に触れるなどは、論外であった。だから捨棄されたのである。

## Ⅱ 建春門院の夢

奥書き以降には建春門院の夢をみた内容もまた、2例記される(傍線部)。

a 建春門院おはしまさでのち、恋しく思まぬらせしかば、思寝にや、常に夢に見まぬらせしが、ただおなじさまに、おはしまし、よりけ近く参り、宮仕へする心地のみして、覚めて、面影恋しく思まぬらせしに、八条の院へ参りて、御塩湯のほどにて、御前へも参らで、十日ばかりありしに、人くは、あたる所へ通りて、御前へ参る道の障子のうちにあて、いと昔恋しくあぢきなくて、この母と頼みし人に、「今日は心地のわびしければ、参るまじ」

と言ひて、昼寝したりしに、b例の見まゐらせしに、冷泉殿御前に候はれしに、参りたれば、「や、御前はすわ、今日見えさせ給はんずるぞ」と仰せらると思て、うちおどろきたりしに、この三位殿の、局へ立ち寄りて、この坊門殿物語などせられしに、「大方腹立ちて、御前へ参らざらん限りは参らじとて、寝てさぶらふ」と申されしに、笑ひて帰られし。御持仏堂におはしますとて、召されしかば、参りて見えさせおはしましてのち、この世にまた二見まゐらせぬこそ、夢もゆゑのありけるにやと、あやしきにつきてあはれなれ。(308～309頁)

崩御後、恋しく思つていたためか、よく建春門院を夢に見た。御存命中より近しくお仕えし、覚めて後は面影を恋慕っていた(傍線a)。恋しい感情を目覚めて後も反芻している、ある意味では幸せな夢である。

2番目に記される(傍線b)のは、八条院に出仕することになった折に見た夢である。因みに作者が二十七歳で八条院へ出仕した時のことは、本文に次のように触れられている。

十日ばかり、御塩湯の名残とて、御前へも参らで、障子の内の人ときてありしが、昔のやうにむつかしくて、風起こりたるよし作りて、一日ばかり籠りゐたりしほどに、御持仏堂へ出でさせおはしまして、召し、かば、参りぬ。

(297頁)

塩湯の療治ですぐにはお目通り叶わなかったこと、気分が悪い(風邪だ)と言つて参上しなかつたこと、持仏堂でお目にかかつたことは奥書以降の記述に共通するが、本文には夢の記述はない。

傍線部bの夢は、次のような状況で見たものである。塩湯の療治をなさる新しい主人にお目通りかなわないまま、十日ほど経た。そんな時期に、「きようは気分が悪いから参上しないわ」と言つて昼寝をしていると、例によつて建春門院が夢に現われて、「ほらほら、きよう、八条院がいらつしやいますよ」とおっしゃつた。そして現実に八条院におめもじ叶つて以来、二度と女院を夢に見ることはなくなつた。

この夢は、作者にとっては人生の転機にみた重要な夢である。建春門院崩御後、七日程。未だ建春門院に執着している作者を、新しい主人に渡す役割、作者の現実を方向付ける役割を夢の世界で女院は果たしている。夢も意味があるのだと作者が納得している(点線部) 点に余裕が感じとれる。

この後、時を経て八条院猶子とられた春華門院と出会うことになる。因みに八条院に関する夢の記述はないが、人生節目の夢は八条院出仕に関連している。出仕の初めに建春門院が夢に現われ、八条院崩御後に、春華門院が唐猫に変容する夢をみているのである。それぞれの女院の存在意義と作者の姿勢の違いは、夢の内容にも象徴的にあらわれる。

## 五、『たまきはる』の特質と夢

### I メッセージとしての夢

本文に、夢の記述を避けた理由として、奥書以降で作者自ら述べているように「夢は人に語れば忌む」(305頁)ということがある。夢を語ることを避けるという点に、作者と当時の人々の夢把握が反映している。夢は現代よりはるかに、信頼できるものだったのである。だからこそ、その記述には慎重にならざるを得なかった。

奥書以降に残された建春門院と春華門院それぞれの夢の記述には、次のような相違点がある。

まず夢をみた時点である。建春門院の場合は、いずれも崩御の後に見た夢である。生前にみた未来の予兆ではない。また、春華門院が白玉と唐猫に変容してしまうのに対して建春門院は生前と変らぬままである。目覚めた後の精神は安定している。人生の新しいステージへ導く建春門院の夢と、滅びの予兆であった春華門院の夢は対照的である。

一方、共通する要素も見逃せない。いずれの夢も現実に連関している。夢と現実是对立しない。この意味で夢は重要性をもっている。この夢把握は、近代以前の人間に共通するものである。『蜻蛉日記』『更級日記』『建礼門院右京大夫集』と『はすがたり』という日記文学と呼ばれるジャンルにも夢は無

縁ではないのだが、とりわけ夢の記述の多い『更級日記』と『はすがたり』に共通するのは、夢が作品の本質に関与しているという点である。

また、たとえば『宇治拾遺物語』には、夢に纏わる説話が24話みられる。そのうち、2話は、他者と同じ夢をみる内容である。『とはすがたり』にも二条と雪の曙が同じ夢を同時に見る二人同夢が記されている。『たまきはる』奥書以降に残された夢の記述は他者と分かち合う質のものではないが、当時の人にとって、夢は固有のものではなかった。一人で見える夢も単に個人の潜在意識の表れではなかった。建春門院の夢と春華門院の夢に共通するのは、夢が異界からのメッセージであるという点である。このような夢把握があるからこそ、夢を記述した草稿の取捨選択は慎重になされたのである。

### II 内なる時間と回想

本文最終部にわずかに記されるにすぎない春華門院と作者の関係性、いかにその崩御が無念であったかは、奥書以降を讀まなければ読者には伝わらない。

唐猫の夢を見て後の作者の警告を人々が無視する記述「人はさしも思合はれず、御祓への行幸の御棧敷をのみ、出で立ち合はれたりしに、かかる尼の身に、申し出づべくもなかりし事を、例の身の上かへりみぬ心の癖に、二位殿参りて、思

し子どもを申たりしに、その御幸のとまりにしを、限りなくうれしと思ふかひもなく、例ならぬことさへ出で来ぬ」から、ご病気の折、既に作者が出家していたことが知られる。続いて春華門院の愛らしさと互いの信頼関係、養育・看病の仕方にやきもきしては、周囲と不調和になっていった経緯が記される。殊に、病をめぐる心配と、周囲の人との軋轢、葛藤、後悔、実名がわかる書きようは、それだけで残すに憚れるものだったであろう。このようなところに、伝えたくない、人に知られたくない作者の意図は汲み取れる。春華門院が書かれなかった要因に事実背景は確かに大きかったであろう。しかし、それだけではない。

ここで再び建春門院崩御の記事と追慕歌をみよう。

○やがてその年の七月、花の散るやうなりし園のはかなさに、桜ばかり、昔も今もうらめしく、さすが形見なる色も匂ひもなかりけり。  
(288～289頁)

○惜しみかね昔も今も散る花や憂き世をいとふ道のしるべは  
(293頁)

「昔も今も」は、文脈を無視すれば「いつの時代にも変らず」の意であるが、この場合は、執筆意図と、執筆時点からみた「昔」「今」であることに留意しなければなるまい。冒頭部、および本文の桜花の用例に照らし合わせれば、桜をめぐる「昔も今も」の「昔」は建春門院を、「今」は春華門院

をさすことになる。既に触れたように、時間把握という観点でみるならば、「今」と表現される春華門院の事は未だ充分過去にはなっていないと言える。

年月が経ち、回想が繰り返された建春門院に対しては、その存在意義と過去の意味を見出し得るまでになっている。すなわち回想が熟成して意味づけが完了している。安定した思いつきとして建春門院は内面化している。「昔」を回想して語る準備は整っている。

一方、春華門院は、未だ「昔」に成り得ていない。春華門院は、作者の内面で決着のつかない要素を残したまま、世を去られたのである。崩御後五年程後に、『たまきはる』は執筆されたと思われるが、外界の物理的時間と内面の時間は均等ではない。過去が意味をもって内面化されない限り、時間は止まったままである。無念の思いは、建春門院崩御の時とは質が違ふ。敬愛する年長の女院に仕える身であった若き日は、女房として主人の運命を左右する立場ではなかった。ひたすら敬慕し、信頼を置いていけばよかったし、そうして女房として育てられたのである。しかし、育てる立場でお仕えた幼い女院に対しては責任の重さが全く違ってくる。ああすればよかった、こうすればよかった、あのとき別の方法をとっていればこんなことにならずに済んだのではないかという無念さ、周囲に理解されず、そのため思うように事が運ば

なかった悔やしきは執筆当時も消えてはいない。幼い主人を愛すればこそ、その思いは深い。春華門院崩御は、「今」のままなのである。それは、既に触れた本文の「夢」の語の揺らぎにも窺がえよう。さらに、的中した予知夢、そのまま現実になった凶夢は、書き残すことが出来なかった。

建春門院の夢を本文に取り入れなかった理由は、春華門院の場合のように、辛いことだからではない。女房としての人生を語る作品に、あまりに私的なことは省いたとも考えられるのだが、夢を語らずとも、昔・古事を語り伝えるという執筆意図は充分果たせた。春華門院の場合とは逆に、書かないことは、むしろ安定を示すのではあるまいか。

## 六、おわりに

本文の「夢」は意図的に選択されたキーワードであり、周到な構成意識をも示している。明確な表現意図をもって使用された「夢」の語なればこそ、捨象された草稿部（奥書以降）には、本文と同じ用法が見当たらないのである。本文における夢は、桜と響き合う美と儂さの比喩として建春門院と春華門院に共通する存在性と喪失を表象している。

冒頭部と相似型の内容をもつ完結態とみなして作者は本文をまとめたのである。夢の記述を避けたのは、ひとつには冒

頭部と本文の構成の調和を壊すからである。また、とりわけ、春華門院に関しては、凶夢であったことに絡んで、執筆時点において未だ意味づけが整っていなかったという、時間と回想の熟成の問題を無視できない。捨象されたのは作者の内的な必然である。

睡眠中の夢は異界からのメッセージである。夢は現実に連鎖する。さればこそ、記述には慎重にならざるを得ない。建春門院、春華門院に関する夢は、内容が全く異なるもの、どちらも作者の人生にとって重要な意味をもっていた。

作品は作者の意図を越えて、享受者によっても作られていく、という面があるとすれば、『たまきはる』は、その顕著な、そして特異な例であろう。作者の手では残されなかったはずの夢内容が、他者によって奥書という形でとどめられたことにより、執筆意図、執筆姿勢が、さらに明確になったと言える。建春門院と春華門院に集中する夢の比喩、夢内容の記述は、それぞれの女院の存在意義と意味連関を浮き彫りにする結果となった。

（教授 日本文学）

## 注

- ① 引用文と頁数は新日本古典文学大系『とはすがたり・たまきはる』（岩波書店 三角洋一校注）による。

- ② 今関敏子『中世日記文学論考』（和泉書院1987）「作品論第二章たまきはる」及び「たまきはる」冒頭部再考——時間認識と回想——」（川村学園女子大学研究紀要第16巻2号 2005年3月）
- ③ ②に同じ。
- ④ 西郷信綱『古代人の夢』平凡社 1993  
酒井紀美『夢語り・夢解きの中世』朝日選書683 朝日新聞社 2001
- ⑤ 今関敏子「『とはすがたり』小考—精神の軌跡と夢—」（日記文学研究誌第6号 2004・3）及び、「『更級日記』の作品空間と夢—虚構と存在把握—」（『更級日記』の新研究—孝標女の世界を考える—新典社2004）
- ⑥ 稲村功和「健御前の言説—『たまきはる』成立の階梯—」（国語と国文学 2004・3）に論じられる事実背景が無視できぬこととは言うまでもない。
- ⑦ ②の日記文学論第二章「日記文学に於ける回想と虚構—『建礼門院右京大夫集』を中心に—」の中で「過去が取り戻せないことは動かしがたい事実であるが、過去の意味及び現在の意味は、回想する現在の姿勢如何によって流動し得るのである。新たな自己発見の可能性は、回想の過程に於いては常にある、ということが出来よう。ただし、これには時間が必要である。回想は時間をかけ何度も繰り返し返すことによって熟成していく、と考えられる。」と述べた。